法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<追悼>追悼・小田切秀雄先生

タテイシ, ハク / 立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
62
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
2000-07-08
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020116

追悼・小田切秀雄先生

立石　伯

小田切秀雄先生の生涯は、宿痾と闘いつつ書くこと、考えること、時代と対峙しつづけることにほかならなかった。大正・昭和・平成、一九一六年から二〇〇〇年まで、つまり二十世紀の転変常ならぬ戦争と革命の酷薄な歴史を一身に引き受けてきた思想者・文学者であった。背筋を伸ばして真正面から自己と世界に相渉った表現者でもあった。

大学人としても法政大学への先生の貢献は計りしれない。詳細は記さないが、総長代行として、教授として、厳しい大学の過渡期を主導的に導いてこられた一人である。日本文学科の現在は、先生抜きに語ることは不可能である。

先生は酒を嗜まれなかったので、魂の隠された秘密めいたことを酒席においてチラとでもお互いに暗示できなかったことが何よりも悔やまれる。左に六月四日、「小田切秀雄先生とのお別れの会」における、弟子の立場からの弔辞を掲載する。今、あちら側の世界で、極度の疲労がいえたら、先に鬼籍に入られた多くの親しい人たちと語りつくせなかったさまざまなことを語りつづけてくださることを祈願するのみである。さらに、その結実をご教示ください。

弔辞

今回の入院にあたって、私たちは以前と同じ奇跡が生じるよう念じておりました。先生は一九一六年・大正五年九月二〇日生れで、八十三歳になられるにもかかわらず、必ず厳しい闘いを克服されて生還されるものと希望を持っておりました。これまでの数え切れないほどの闘病のおりも、つねに生死の境での苦闘の末に生の側への帰還を果たされていたからであります。

さまざまな病気との闘いにおいてこれまで示された驚くべき内面的・精神的な力は、刮目すべきものでありました。いまだ解決されないで残されたままのさまざまな文学と思想についての仕事があるという使命感に支えられた促しが強く働いたと考えられました。精神と肉体の隠された大きな力が命の根源に作用して、今回も恢復されると、新たな文学と時代認識が展開されている「群像」連載中のお仕事がさらに充実したかたちで推進されていくに違いないと想いなされたからでもあります。けれども、今、その望みはたちきられ、私たちはまったく途方に暮れている有様であります。

先生の教員歴は一九四一年の横須賀中学、府立園芸学校から始まり、戦中から法政大学国文科講師をされ、多くの有為な人々を育ててこられました。戦中には、出征する学生に「自らを失うな」と記して、憲兵隊に拘留されたことがありました。その形は対象において異なれ、ここに学生に対する教師として、文学者として、思想家としての姿勢が明白に、尖鋭に表現されているといえます。戦後は専任として法政大学文学部日本文学科で講座を担当され、これまた多くの文学志望者をさまざまな研究領域において育てあげられたことは再言するまでもありません。しばしば口にされた「一本の真っ直ぐな堅い棒」のごとく見事な生を貫かれました。断るまでもなく、先生はさまざまな場で教える傍ら、文学の現場にも昭和八年・一九三三年から六十有余年間立ちつづけてこられました。その文学上の達成もきわめて高度なもので、私たちの一つの指標でもありました。

先生は人間が人間としての自由と尊厳をもち、支配やさまざまな差別が揚棄された高度な平等社会や世界平和の実現を求めつづけられ、八十三歳にして、未だ革命ならずという無念を抱いて旅立たれたのは、残念至極だと推察いたします。百歳まで生きて、そのような世界を自分の目で確認したいとおっしゃっていた言葉が脳裡を走ります。

教え子のうち東京近郊に住んでいる人々が、「小田切秀雄先生を囲む会」を先生の体調が許すかぎり開催し、先生を激励しようとしました。ところがいうまでもなく、逆に若い私たちがもっと仕事を進めるように慫慂されつづけました。また、先生のたゆみない思想的闘いの現況をうかがい、相変らずの闊達なお仕事ぶりと文章世界の強靭さに目を見張りつづけさせられてもおりました。文学の現場にたちつづけ、閉塞し低徊する社会や歴史や思想とあらがう姿が、また人間的真実を求める若々しい力がそこにはみなぎっておりました。成熟、老成、達観、馴れあいなどを拒否する精神が毅然と屹立していました。潑剌とした青年の精神が発現されていたといえます。

多くの優れた文学者や教師をはじめとして、わたしのような不肖の弟子をも適切に導いて下った先生の学恩・文恩に私たちは今なおまったく報いることができないままであることを恥じております。ただ、今年の秋には、先生が待たれていた小田切秀雄全集、また小田切秀雄論集が上梓される予定になっております。無力ですが、完成させます。今後も先生の顰蹙をかうようなことすらするかもしれませんが、以前にもまして叱責の言葉を掛けてくださいますようお願いいたします。先生の選択された厳しい生き方と文学に対する独自で真摯な考えの幾らかでも受け継いでいくことができるよう努力する覚悟ですので、厳しい眼で見守りつづけていただきたいと思います。

今は、あちら側の世界で静かにお休みください。

（たていし　はく・文学部教授）